

宅緩和ケアに従事していた。判断能力が正常な間に終末期に希望する医療について事前指示していた人は少なく、家族の判断に委ねられる。どんな状態でもいかに生きていてほしいと延命を願う一方で、回復の見込みがないなら死を先延ばしする医療は受けず自然に安らかな最期を迎えてほしいという思いの間で家族も非常に悩み、家族内での意見が分かれることもある。入所者の「いのちの選択」は家族の死生観と施設の見取り態勢の有無に大きく影響を受ける。我々は三年半で家族から希望があった入所者四十四名を「自然死」で看取った(平成二十年

五年度・看取り率九割)。特養あんどの里(魚津市)の医療・介護職員は、入所者の人生の最終章に寄り添

い、穏やかな「旅立ち」のお手伝いをするために自ら死生観を養い深めるよう努めている。

私は平成十八年に訪問看護に配属異動となり、終末期を自宅で過ごす家族と看取りを共有することになった。生命の終焉は周囲の人に、様々な畏敬の念を抱かせる。最後の一呼吸を見守る静寂はこのうえない崇高さがある。その瞬間が「家」という舞台でしか味わえない感動である。職業を通じて「大切な瞬間に立ち会わせていただく」謙虚な気持ちに誘(いざな)われる。

私達の日々は、終末期が悔いのない時間になりますよ

に、よきパートナーとして寄り添うことにあると考

えている。

から見守っている。その日々に寄り添って支援していく時、ヘルパー自身も共に看取りの覚悟が必要である。「いざとなったら...どうなるのか」という家族の不安は、同時にヘルパーの気持ちの中にもあり、今後のヘルパーの研修課題だと考える。

治療について。このように身体の視点に、暮らしの視点も加わることが出たら素晴らしいと思う。ホームヘルパーがその人らしい暮らし方を支え、その人らしい死に方を支える事が出来るように、生きる事に続く死についてしっかりと向き合い、看取りの覚悟を受け止めていく質を獲得していかなくてはならないと思う。それはあくまでも生きる事・死ぬ事を管理することではなく、受けとめ寄り添う形で成されるものであると思う。

### 終末期が悔いのない時間になるようよきパートナーとして寄り添う

南砺市訪問看護ステーション

村井 眞須美

看取り先生が身を挺して提起した「日本人の死の迎え方」

「看取り先生の遺言を読んで」

富山県保険医協会副会長 井本 正樹

看取り先生のおまかせ」とい

は「医師におまかせ」という

「患者」ではなく、最後まで

医療との連携

在宅支援の中で病状の緩和や医療処置について、在宅医や訪問看護の体制がしっかりと整っている事は、家族にとっても介護関係者にとっても大きな支えである。介護職としても医療的な知識も学びながら共に支えている

## 岡部健先生が身を挺して提起した「日本人の死の迎え方」

「看取り先生の遺言を読んで」

富山県保険医協会副会長

井本 正樹



文藝春秋  
四六判、303ページ  
定価 1,400円  
2013年1月発行

本書は、大宅壮二ノンフィクション賞作家の奥野修司氏が、二〇一二年九月に亡くなった岡部健先生へのロングインタビューをもとに執筆したもので、先生の「遺言」ともいえる書です。

岡部先生は東北大学出身で、肺がんの専門医として宮城県立がんセンター外科医長として多数の肺がん手術を執刀されました。しかし、治すことのできない多くの肺がん患者に出会い、

病院での治療に限界を感じ、一九九七年に「治らないがん患者のための医師になろう」と、岡部医院を五人のスタッフで開院されました。

十五年間在宅で看取りを行ってきた岡部医師自らもがんになり、

好邪魔多し、といいますが、二〇一〇年一月に自らも末期がんと告知されました。信頼する友人による手術は成功しますが、四カ月後のCTで、四箇目の肝転移(五cm)が見つかり「予

後十カ月」と言明されます。熟慮の上先生はTSI投与後のラジオ波での肝転移焼灼を受けられたあとは、病院は受診されず、亡くなるまでの二年弱、在宅医療の現場へ戻られ医療活動をされました。

多くのがん患者を看取らせた先生でも、死を覚悟せざるを得なくなった時、「このように闇の方へ降りていけばいいのか、その道しるべのなきに愕然とした

と述懐されています。そんな中で、あの東日本大震災に見舞われ、更に自院の看護師が在宅患者を助けようとして津波に呑みこまれ、先生の死生観も大きく変わるといいます。

故岡部健先生が考えた抗がん剤の使い方、疼痛緩和、スピリチュアル・ケア、大きな命の存在、臨床宗教師、「お迎え」とせん妄：等、是非、諸兄にもご一読頂きたいと思えます。

## 第5回東海北陸在宅医療推進フォーラム

富山で初めての開催に330人が参加

9月23日、サンシップとやま(富山市)において「第5回東海北陸在宅医療推進フォーラム」(実行委員会事務局:前川クリニック)が、東海北陸在宅療養支援診療所連絡会と富山県訪問看護ステーション連絡協議会の主催で開催されました(協会後援)。

このフォーラムは、同連絡会が毎年東海北陸の担当県で開催しているもので、富山県内で開催されるのは初めて。県内外の医療・介護関係者を中心に330人が参加しました。

市民公開講座として開催された第1部では、日本在宅ホスピス協会会長の小笠原文雄氏(岐阜県)が「在宅緩和ケアで朗らかに生きよう」、NPO法人ささえる医療研究所所長の村上智彦氏(北海道)が「支える医療の実践」と題して講演、それぞれの地域における在宅医療の実践例

を紹介しました。第2部のシンポジウム「24時間安心の在宅療養支援体制の構築」では、県内から佐藤伸彦先生(ものがたり診療所)、山本美和先生(富山協立病院内科)、圓谷朗雄先生(富山赤十字病院内科・地域医療連携室)がそれぞれ在宅療養支援診療所・病院、在宅療養後方支援病院について紹介し、地域において求められる役割や今後の展望について報告しました。



医療関係者を中心に330人が参加(9月23日、サンシップとやま)